日本中東学会ニューズレター

JAMES
NEWSLETTER

No. 140

2015/7/30

目　次

新会長あいさつ……2
理事会・総会報告……3
第31回年次大会報告……8
第32回日本中東学会年次大会の開催について……31
『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告……31
第5回日本中東学会奨励賞の選考結果および同賞授与式について……34
第9回シャイフ・ザイード書籍賞を塙治夫氏と杉田英明氏が受賞……35
寄贈図書……35
会員の異動……37
事務局より……38
編集後記……38

新会長あいさつ

東長　靖

1985年の設立から30年を経た日本中東学会の会長職を、はからずもお受けすることになりました。先輩方の築いてこられた蓄積を元に、学会の充実発展のために、微力を尽くしたいと考えています。

本学会の大きな特色として、学際性と国際性を挙げることができると思います。日本の中東研究は、世界のなかでは珍しく、歴史学が相当部分を占めていますが、それ以外にも、政治学・経済学・人類学・思想研究・宗教学・文学・言語学など、さまざまなディシプリンの研究者が一堂に会しています。時代的にも、イスラーム初期から現代までの広がりをもっています。

さまざまなディシプリンを越境し、統合して研究を進めていこうとするのが、地域研究だと思いますので、本学会のもつこのような環境はこれからも大切にしていきたいと思います。私自身は、元々中国古典思想や仏教学をやってみようと思っていたのですが、おそらくそういう研究領域では、このような学際性に恵まれることはなかったでしょう。おもしろい研究分野に身を置いたものだと思います。

国際化は、歴代の理事会が推進してきたものです。私は、国際交流担当の理事を何期か務めましたが、そのおおもとは、2002年の第1回中東研究世界大会（WOCMES）にあると思っています。この時、私たちがスーフィズム・聖者信仰について進めていた共同研究のセッションを出すにあたって、当時の中東学会から全面的なサポートを得ました。単に派遣費用のことだけでなく、当時の理事の先輩方が、発表者や司会などを務めて下さり、盛りたてて下さいました。初めての海外での大舞台で緊張したものですが、物心両面にわたる支援を学会から頂いたからこそ、セッションを成功させることができたのだと、今でも感謝の念にたえません。この時にセッションを組んだのが縁で、WOCMES Committee（当時はWOCMES Council and the International Advisory and Program Committee of the First World Congress for Middle Eastern Studiesという名称でした）のメンバーに選ばれ、現在、日本中東学会はこの委員会に3名の委員を送っています。

2014年のWOCMES Committeeでは、WOCMESを発表の場とするだけでなく、発信の主体とすべきという議論がなされ、その皮切りとして、今年のMESAでパネルをもつこととなりました。それを立案するワーキンググループに日本からもぜひ入ってほしいという要請があり、当時会長だった栗田禎子さんがメンバーになっています。日本の中東研究が、着実に国際的な地位を占めてきていることの証左だと思います。

また、本学会は東アジアにおける中東研究のハブの役割も果たしています。昨年秋にも、京都でAFMA大会が開催されましたが、韓国・中国・モンゴルの中東学会との連携を継続し、さらに参加国の拡大も視野に入れつつ、活動を続けています。AFMAの活動の主体を担ってきたことの意味は大きいと思いますし、その重要性はこれからも増えることこそあれ、減ることはけっしてないと考えます。

30年を経て、40年の不惑の年をめざして新たなスタートを切る節目となりました。中東情勢そのものは、不惑とは正反対の様相を呈していますが、私たちは浮足立たずに、地道に学問研究を進めたいものです。そのためのアイデアを得る場、また研究成果を公表する場として、日本中東学会がますます大きな役割を果たせるように、と願っています。

理事会・総会報告

【2015年度第1回理事会】

日時：2015年5月16日（土）午前10時から午後12時40分

場所：同志社大学今出川校地良心館RY440号室

出席：赤堀雅幸、飯塚正人、江川ひかり、大稔哲也、粕谷元、栗田禎子、黒木英充、近藤信彰、東長靖、林佳世子、保坂修司、松本弘、森本一夫、森山央朗、山岸智子、山口昭彦

欠席：なし

［議題］

１．森山央朗会員を特任理事に任命し、任期をさかのぼって2015年4月1日からとすることを決定した。

２．2014年度事業報告・2014年度決算報告を承認した（詳細は総会議事録参照）。

３．2015年度事業計画・2015年度予算案を承認した（詳細は総会議事録参照）。

４．2015年10月4日に九州大学において公開講演会を開催することが確認された。

５．総会資料を確認した。

６．総会の司会者、議長、書記、議事録署名人の候補が報告され、監事の候補者を末近浩太会員と帯谷知可会員とすることを承認した。

７．「中東学会30年の歩み：会員動向分析報告」が完成し、ホームページ上に掲載予定であることが報告された。

８．AJAMESバックナンバーの保管状況が報告され、10部を保管の上、残部を2016年度年次大会（慶應義塾大学）で無償配付することを承認した。

９．学会ホームページの再検討が議論された。

１０．会員の異動が報告された。

１１．AJAMES 編集活動が報告され、2015 年度の編集体制・編集方針を承認した。また、査読時の匿名性の向上と機関リポジトリに公開される博士論文に関して、関連の諸規定の改正が適され承認された。Web 上での配信については、CiNii より J-stage への移行が説明・承認された。これに関連して、オープンアクセスと会員サービスの両立について、引き続き検討していくことが確認された。さらに、Web 雑誌化や、欧文論文率の向上、海外の研究者への査読依頼などの国際化についても、検討・議論を続けることが確認された。

【日本中東学会第 28 回年次総会報告】

日時：2015 年 5 月 16 日（土）17:30〜18:30

会場：同志社大学今出川校地良心館 RY107 教室

出席：当日出席者 74 名、委任状提出 160 名、計 234 名

（会員総数 709 名、定足数 5 分の 1 の 143 名により、総会成立）

１．司会および総会役員の選出

堀川徹会員の司会により、議長として小杉泰会員、書記として長岡慎介、三代川寛子両会員、議事録署名人として末近浩太、谷口淳一両会員を選出した。

２． 2014 年度事業報告および決算

第 15 期各担当理事より、総会資料に基づいて報告された。

(1) 事業報告（山口昭彦事務局長）

a) 第 30 回年次大会を、2014 年 5 月 10－11 日に、東京国際大学第 1 キャンパスにおいて開催した。

・公開講演会・シンポジウム「日本中東学会 30 年の回顧と展望」

・研究発表 7 部会 47 本、企画セッション 2 本。

・韓国中東学会から SEO Jeongmin 副会長を招待した。

b) 日本中東学会年報（AJAMES）第 30－1 号、第 30－2 号の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。

・海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った。

・国立情報学研究所論文情報ナビゲータ（CiNii）上で公開されるよう手配した。

c) 2014 年 7 月 13 日に「日本中東学会創設 30 周年記念座談会」を東京外国語大学本郷サテライトで開催した。

d) 2014 年 8 月 8 日に緊急研究集会「ガザの事態をめぐって」を東京大学東洋文化研究所で開催した。

e) 2014 年 8 月 18~22 日に中東工科大学（トルコ共和国アンカラ）で開催された第 4 回中東研究世界大会（The Fourth World Congress for Middle Eastern Studies：WOCMES4）に、日本中東学会として 4 つのパネルを組んだ。

f) 2014年11月2日に第20回公開講演会「中東における「革命」の系譜：エジプトとイランの歴史をひもとく」を東京大学本郷キャンパスにおいて開催した。

g) 2014年12月13〜14日にAFMA（アジア中東学会連盟）幹事学会として、*De/Re-Constructing Middle East Studies from Asian Perspectives: Towards the20th Anniversary of the AFMA*と題する国際会議を京都大学で開催した。

h) 第5回日本中東学会奨励賞受賞者を選考した。

i) ニューズレター和文4回（総頁93頁）を発行した。第135号（4/21、16頁）、第136号（7/31、年次大会特集、35頁）、第137号（12/1、20頁）、第138号（2015/2/20、22頁）。

j) 「日本における中東研究文献データベース1989-2014」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開した。

k) 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行った。

l) 地域研究学会連絡協議会の幹事組織として、地域研究の興隆を図るとともに、参加組織の相互交流に努めた。

m) 東洋文庫との連携事業として「日本における中東研究文献データベース」作成にかかる研究動向調査、データ編集と作成を行った。

n) 30周年記念企画の一環として、会員データを分析した。本データは学会ホームページ上に公開予定である。

o) 会員の増減：2014年度中には入会者33名、退会者30名（うち、会費滞納による退会16名、自主退会14名）の異動があった。その結果、2015年3月31日現在の会員数は709名（正会員546名／うち海外在住12名；学生会員163名／うち海外在住5名）となった。

(2) AJAMES第30-1号、第30-2号編集報告（保坂修司編集委員長）

・AJAMES第30-1号、第30-2号がそれぞれ2014年7月と2015年2月に刊行された。

・第30-1号では、論文4本（すべて日本語）、研究ノート2本（すべて日本語）、書評2本（すべて日本語）、博論要旨3本（すべて日本語）が掲載された。

・第30-2号では、論文3本（すべて日本語）、特集「日本中東学会30年の回顧と展望」7本（会長まえがき、基調講演1、報告5、すべて日本語）、博論要旨1本（英語）、JAMES Activities 2014が掲載された。

(3) 2014年度決算報告（山口昭彦事務局長）

・年会費の納入率が向上し、年会費収入が予算より60万円ほど増えた。

・賛助会員からの会費納入があった。

・事務局運営の効率化を進め、事務局費を抑制することができた。

・各事業費の支出が予算より少なく、事業費全体として予算額より80万円ほど少なくなった。

(4) 監査報告（黛秋津監事）

・2015年4月11日に学会事務局（聖心女子大学）にて、2014年度の会計監査を行った結果、適正に執行されたことを確認した。

＜質疑応答＞なし

＜採決＞　以上の 2014 年度事業報告および決算報告について、総会はこれを承認した。

３．第16期役員選挙報告、特任理事の選出、理事の任務分掌、監事の選出の報告

(1) 第16期役員選挙報告（齋藤久美子選挙管理委員会委員長）

a) 評議員選挙については、2015年1月16日開票の結果、有権者数394名のうち、投票者数149名（うち有効票134、無効票15、白票0)、投票率は37．8%であった。学会細則VIII-2により、第16期の評議員59名を選出した。

b) 評議員選挙に続き、新評議員による理事選挙が行われ、2015 年 2 月 7 日開票の結果、理事15名が選出された。なお、理事選挙にあたり、会則第9条の規定により、臼杵陽会員、小杉泰会員、長沢栄治会員、三浦徹会員は被選挙権を保有しないため、予め理事候補より除外された。投票数44（うち有効票39、無効票5、白票0)、投票率は74.6%であった。

(2) 特任理事の選出および理事の任務分掌報告（森山央朗事務局長）

a) 森山央朗会員の事務局長就任に伴い、同会員が特任理事として選出された。

b) 2015年2月19日に第15期・第16期合同理事会が聖心女子大学で開催され、役職・理事業務の報告と引き継ぎが行われ、同日同所で開催された第16期新理事会において、以下の通りで、会長と事務局長、理事の任務分掌、および監事の選出が行われた。

会長：東長靖、AJAMES編集委員会：粕谷元（編集委員長)、保坂修司（副編集委員長)、近藤信彰（副編集委員長)、国際交流委員会：栗田禎子、江川ひかり、林佳世子、企画担当：森本一夫、黒木英充、山岸智子、ニューズレター・書記担当：松本弘、ホームページ・総務担当：山口昭彦、年次大会担当：赤堀雅幸、渉外担当：大稔哲也、財務・会則担当：飯塚正人

(3) 監事の選出（森山央朗事務局長）

末近浩太、帯谷知可の両会員が選出された。

＜質疑応答＞なし

＜採決＞　以上の第16期役員選挙報告、特任理事の選出、理事の任務分掌、監事の選出の報告について、総会はこれを承認した。

４．2015年度事業計画および予算

第16期各担当理事より、総会資料に基づいて報告があった。

(1) 2015年度事業計画（森山央朗事務局長）

a) 第31回年次大会を2015年5月16~17日に、同志社大学今出川校地において開催する。

b) 日本中東学会年報（AJAMES）第31-1号（2015年7月）、第31-2号（2016年1月）の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。刊行にあたり、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「国際情報発信強化」の助成を受ける。

c) 第 21 回公開講演会「イスラームの多様な貌（かお）：共生のための理解をめざして」を2015年10月4日に九州大学で開催する。

d) ニューズレターを年数回発行する。年次大会報告号は紙媒体で発行する。

e)「日本における中東・イスラーム研究文献データベース1989-2015」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開する。

f) 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行う。

g) 海外の関連学会との交流を促進する。

・第31回年次大会に、韓国中東学会からKIM Suwan理事を招待する。

・2015年度韓国中東学会国際会議に、日本中東学会から理事3名が参加する。

・MESA年次大会で中東研究世界大会WOCMESが組むパネル「各国における中東研究の技法」に日本中東学会として会員を派遣する。

h) 地域研究学会連絡協議会の幹事組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。

i) 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。

j) 東洋文庫との連携事業として「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」作成にかかる研究動向調査、データ編集と作成を行う。

k) 学会事務局を、聖心女子大学から同志社大学に移転する。

l) 2015-2016年度会員名簿を刊行する。

⑵ AJAMES第31-1号、第31-2号編集計画、2015年度編集体制（粕谷元編集委員長）

・現在、第31-1号の刊行準備を進めており、7月に刊行予定である。

・第31-2号は2015年6月1日に投稿を締め切り、2016年1月に刊行予定である。

・2015年度の編集体制として1名の編集委員の交代があった。

⑶ 2015年度予算案（森山央朗事務局長）

・収入のうち、「科学研究費補助金（国際情報発信強化助成）」採択分が計上された。

・支出のうち、事務局費を昨年度より100万円ほど増額した。これは、事務局移転に係る経費増加に伴うものである。

・事業費全体としては昨年度より　210万円ほど減額されているが、昨年度支出されたAFMA大会開催費、WOCMESパネル派遣費が不計上となったことによる。

＜質疑応答＞

（質問）AJAMES欧文校閲費、ニューズレター等発行費の増額の根拠は何か。

（粕谷元編集委員長）AJAMES欧文校閲費については、AJAMES第31－2号でAFMA関連の原稿の英文特集号を組むことを予定していることと、英文投稿規定・執筆要領の再整備を計画していることに伴う増額である。

（森山央朗事務局長）ニューズレター等発行費については、今年度、会員名簿を発送に伴う郵送費増加に伴う増額である。

＜採決＞　以上の 2015 年度事業計画案および予算案について、総会はこれを承認した。

５．第５回日本中東学会奨励賞審査結果の報告（臼杵陽奨励賞選考委員長）

・選考委員会による厳正な選考の結果、丸山大介会員による AJAMES 第 28-1 号掲載論文が当賞に推薦された。

・丸山大介会員に第５回日本中東学会奨励賞が授与された。

６．会長挨拶（東長靖会長）

７．議事終了につき議長の小杉泰会員が降壇し、司会の堀川徹会員によって総会の閉会が宣言された。

森山央朗

第 31 回年次大会報告

【プログラム】

2015 年 5 月 16 日（土）公開企画（同志社大学今出川校地良心館 RY107 教室）

シンポジウム『中東の「長い 19 世紀」：流動化する地域秩序、政治化する「宗派」』

講演部司会：岩坂将充（同志社大学）

討論部司会：飯塚正人（東京外国大学）

第 1 部『オスマン帝国の崩壊と「宗派共存」の終焉：キリスト教徒の経験から』

佐原徹哉（明治大学）「オスマン帝国解体期のキリスト教徒：「宗派」争点化の近代史」

菅瀬晶子（国立民族学博物館）「イスラエル国家と在地キリスト教徒社会：「宗派」争点化の現代」

第 2 部『中東地域秩序の再編と「宗派対立」の拡大：イスラーム主義の動向から』

坂梨祥（日本エネルギー経済研究所）「イラン革命の衝撃と「宗派主義」：「イスラームの革命」か「シーア派の革命」か」

末近浩太（立命館大学）「中東政治は「宗派対立」を乗り越えられるのか：「アラブの春」から「イスラーム国」へ」

アラブ音楽ミニコンサート：トリオ演奏

常味裕司（ウード）、木村伸子（ヴァイオリン）、サンペー（レック）

総会

懇親会（於、京都平安ホテル）

2015 年 5 月 17 日（日）企画セッション・個人研究発表

（同志社大学今出川校地良心館 4 階）

企画セッション１

『「アラブの春」からダーイシュ台頭へ：暴力の連鎖と混乱の加害者、被害者、そして実行犯は誰か？』

青山弘之（東京外国語大学）

「シリア：「今世紀最悪の人道危機」をもたらした重層的紛争」

岩坂将充（同志社大学）「「アラブの春」後のトルコ：安定した「民主国家」をめぐる不安定な「同盟」」

髙岡豊（中東調査会）「「アラブの春」とイスラーム過激派の利害得失」

企画セッション２

Historians in the Pre-Modern Middle East: Their Aims, Techniques and Products

Moderator: MORIMOTO Kazuo (The University of Tokyo)

OTSUKA Osamu (The University of Tokyo)

"Visualising General History: Hamd Allah Mustawfi's New Style of Historical Writing"

BAUDEN Frédéric (Université de Liège)

"Al-Maqrizi at Work: The Case of His Collection of Opuscules"

ITO Takao (Kobe University) "The Ottomans in Mamluk Historiography"

Commentator: NAKAMACHI Nobutaka (Konan University)

個人研究発表

Session 1

MORRISON Scott (Akita University) "Arab and Islamic Commercial Jurisprudence: Its Employment in Contemporary International Finance"

KIM Suwan (Korean Association of the Middle East Studies) "Perception of Arab, Muslim, and Islam by Koreans before and after the Arab Spring"

NASSR Qolamreza (Hiroshima University, J) "An Attempt for Islamic Democracy in Iran: In the Case of Mehdi Bazargan's Activity and Ideology"

第２部会

外山健二 （常磐大学）「アメリカ文学史のイスラーム：第三次中間報告」

福田義昭（大阪大学）「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象」

岡戸真幸（上智大学）「カナダのアラブ系移民に関する予備考察：エジプト人移民を中心にして」

阿久津正幸（東洋大学）フセイン・ザナティー（北見工業大学・院）「エジプト・ミニア市における初等教育実験：母国語（現代アラビア語）環境と外国語（英語）習得技能の観点から」

鷲見朗子（京都ノートルダム女子大学）鷲見克典（名古屋工業大学）「アラビア語専攻学生の学習動機づけと学習関連結果との関係：自己決定理論に基づく検討」

小島宏（早稲田大学）「滞日ムスリム留学生のトランスナショナルな家族とハラール食品消費」

第3部会

竹田敏之（京都大学）「モーリタニア学統の広域ネットワークとアラビア語学：シンキーティー知識人のマシュリクにおける貢献

二ツ山達朗（京都大学・院）「チュニジアにおける宗教グッズの扱われ方：クルアーン室内装飾具の事例から」

高橋雅英（独立研究者）「アルジェリア・ブーテフリカ政権の炭化水素政策：2005 年炭化水素法案を中心に」

田中友紀（九州大学・院）「リビア・カッザーフィー体制存続における革命評議会の役割とその変容」

小林周（慶應義塾大学・院）「政変後リビアにおける民兵組織の活動の分析：南部地域に着目して」

第4部会

後藤絵美（東京大学）「イスラームをめぐる世論の形成：20 世紀初頭エジプトのヴェール論争を事例に」

内田直義（名古屋大学・院）「アズハル中等教育機関の独自性とエジプト政府による関与：1961 年法律第 103 号の検討を中心として」

黒田彩加（京都大学・院）「現代エジプトにおける法・社会・イスラーム：ターリク・ビシュリーの主体的文化論」

竹村和朗（東京大学・院）「国有沙漠地の私的所有権：エジプト・バドル郡の住民の実践と契約から」

第5部会

細田和江（中央大学）「イラク系ユダヤ人作家サーミー・ミハエル（Sami Michael: 1926- ）のふたつの＜ワタン＞：初期作品に見るバグダッド／ハイファの表象」

金城美幸（日本学術振興会）「イスラエル建国以前の労働シオニズムにおける民族共生論再考」

山本健介（京都大学・院）「パレスチナ自治区・ヘブロン／ハリールにおける旧市街復興運動：ユダヤ化政策に抗して」

佐藤麻理絵（京都大学・院）「シリア難民流入と社会生態空間の拡張：ヨルダン北部都市マフラックの事例から」

吉年誠（一橋大学）「イスラエルにおける「公有地」改革の中の農業入植村―農地の「私有化」を巡って―」

第6部会

田熊友加里（日本女子大学）「マイヤー・ミュッラー商会にみる 19 ～ 20 世紀スイスにおけるペルシア絨毯交易：国立民族学博物館（大阪府吹田市）所蔵ミュッラー絨毯コレクションを事例として」

椿原敦子（国立民族学博物館）現代イランにおけるシーア派哀悼儀礼の変容：マッダーヒーを手がかりに」

中村菜穂（大東文化大学）「詩人ミールザーデ・エシュギーにおける〈祖国愛〉の形象：イラン立憲革命文学の断絶と継承をめぐって」

阿部哲（長崎大学）「イラン社会における環境ディスコースの普及と多義性：人類学的視点からの考察」

森山拓也（同志社大学・院）「原発導入に走るトルコ：安全性、民主主義の観点からの批判的検討」

鈴木慶孝（慶應義塾大学・院）「現代トルコの「トルコ人のムスリム性」が有する排除の理念に関する一考察：ギュレン運動による社会的包摂の有効性の観点から」

今井宏平（日本学術振興会）「トルコ外交における経済団体の貢献 ：TOBB の活動を中心として」

第 7 部会

石田友梨（早稲田大学）萩原淳（京都大学）「17-18 世紀ハラマインにおける師弟関係：シャー・ワリーウッラーの伝記情報のネットワークによる視覚化とその分析」

山本直輝（京都大学・院）「イマーム・ビルギヴィーにおける「倫理の学としてのスーフィズム」の意味と目的」

上原健太郎（京都大学・院）「ブルネイ・ダルサラームにおけるイスラーム型担保融資（Ar-Rahnu）：担保概念とその実践を中心に」

渡邊駿（京都大学・院）「アラブ君主制国家群の体制維持メカニズムを考える：グローバル化時代のヨルダン・ハーシム王国を素材にして」

堀井聡江（ 桜美林大学）「近代イスラーム立法の起源：タルフィークを中心に」

第 8 部会

江川ひかり（明治大学）「19 世紀末・20 世紀初頭オスマン帝国における近代演劇および印刷・出版文化にメフメト・ターヒル・ベイが果たした役割」

小澤一郎（上智大学）「ガージャール朝によるペルシア湾武器取引規制と南部イランの武装化」

伊藤彩（明治大学・院）「オスマン帝国末期における出版と「3 月 31 日事件」：『火山』紙の分析を中心に」

武田祥英（千葉大学・院）「第一次大戦期英国の中東分割政策再検討：1910 年代英国の中東石油確保政策との関連から」

川本智史（日本学術振興会）「15 世紀末ブルサの不動産所有に関する考察」

小笠原弘幸（九州大学）「古典期オスマン帝国における「スルタン」号について」

秋葉淳（千葉大学）「裁判官とその発給文書：18 世紀オスマン朝歴史家= 裁判官シェムダーニーザーデ・フンドゥクルル・スレイマンの業績」

第9部会

中野さやか（日本学術振興会）「マームーンの治世がいかに記されたか：イブン・タイフール『バクダードの書』とタバリー『諸預言者と諸王の歴史』の比較」

森本一夫（東京大学）「ウズベク・ハーンの師父「サイイド・イブン･アブドゥルハミード」の素性：ナジャフからサライ、ホラズムへ」

中道静香（大阪大学）「3 巻本の『千夜一夜』完全版写本：後期エジプト系(ZER) 写本群の成立に関する一試論」

角田紘美（早稲田大学・院）「アラブ征服期におけるマグリブのキリスト教徒」

篠田知暁（独立研究者）「15 世紀後半のモロッコ北部におけるムスリムとキリスト教徒の関係」

辻明日香（日本学術振興会）「コプト聖人アラムに帰せられる聖性：キリスト教とイスラームのはざまで」

【公開シンポジウム】

中東の「長い 19 世紀」―流動化する地域秩序、政治化する「宗派」―

本シンポジウムでは、中東地域の近現代史の文脈の中で、「宗派」がどのように政治的争点となり、その背景にどのような政治と社会の構造変動があるのかについて、キリスト教、イスラームそれぞれの視点から議論がなされた。

第1部では、キリスト教の立場から「宗派」の歴史と現在について報告がなされた。佐原報告では、オスマン帝国解体期のマケドニア、アルメニア、セルビア等における民族主義運動組織に注目し、利害が相反しているはずの各組織が様々な局面で協力関係にあったことを指摘した。菅瀬報告では、イスラエルにおけるアラブ系キリスト教徒市民に焦点を当て、徴兵問題と同化政策を契機にイスラエル政府に対する姿勢が変化した過程を明らかにした。第2部では、イスラームにおける「宗派」と政治的争点について報告がなされた。坂梨報告では、イラク戦争以降のサウジアラビア等でのシーア派住民の権利要求運動を、各国政府が「イランの介入」と表現することで、体制の安定回復のための共通論理としたことを指摘した。末近報告では、近年まで中東地域に「宗派」対立が顕在化しなかった理由として「保革対立」の膠着状態を挙げ、「アラブの春」がこれを弛緩させたことで、大衆動員の手段として「宗派」が利用されるようになったと論じた。これら4つの報告からは、中東地域の政治における「宗派」の重要性は、キリスト教・イスラームを問わず、時代が下るにしたがって増してきたことが理解できよう。

討論部では、個別の報告に関するものとともに、本シンポジウムのテーマである「長い 19 世紀」や中東地域の「宗派」対立の不可逆性についても、フロアから質問が

あがった。中東地域の今後を考えていくうえでも、有意義なシンポジウムとなったといえよう。

岩坂将充

【ミニコンサート報告】

ミニコンサートの部では、ウード、ヴァイオリン、レックによるトリオ演奏が披露された。講演直後の張り詰めた雰囲気からスタートしたが、１曲目のイブラーヒーム・アリヤーン作曲「サマーイー・バヤーティー」冒頭のウードソロで、場内は一気に別世界に引き込まれていった。

続く２曲目はエジプトの歌姫ウンム・クルスームの持ち歌として知られる、ムハンマド・アブドゥルワッハーブ作曲の「エンタ・オムリー」 。ウードとヴァイオリンの絶妙な掛け合いで再現された、あまりにも有名な冒頭フレーズには、エジプト音楽ファンのみならず、アラブ諸国に滞在経験のある者はみな郷愁を誘われたのではないだろうか。続く３曲目「アルジェリアの夜」、そして最後の４曲目「クッル・ダ・カーン・レー」もまたアブドゥルワッハーブの作品であり、会場のあちこちで賛嘆のため息が漏れ、演奏終了時には歓声が上がった。

この日の演目はいずれも端正で聞きやすいメロディーの曲であったが、個性の強い２種類の弦楽器が丁々発止とやりあうさまを、レックの静かなリズムが支えていたのが印象的であった。今回の企画は木村伸子氏（ヴァイオリン）の紹介により、日本を代表するウード奏者の常味裕司氏と、大阪を中心に活躍する打楽器奏者のサンペー氏に出演をご快諾いただき、実現の運びとなった。ここに記してお三方に謝意を表したい。

中町信孝

【研究発表会場から】

第１部会

Morrison Scott 氏は、Arab and Islamic Commercial Jurisprudence : Its Employment in Contemporary International Finance と題して、1975 年の始まるドバイ・イスラーム銀行に始まるイスラーム金融の拡大とその核心としての道徳的、倫理的価値や概念が今日の世界的な金融とその法において持つ教訓はなにか、という問いのもとで、具体的な取引諸形態において比較考量し、パワーポイントを駆使してその成果を発表した（9 名の聴講者）。発表後には濃厚な専門的な質疑応答がしばし為された。

Kim Suwan 氏は、Perception of Arab Muslim, and Islam by Koreans before and Koreans before and after the Arab Spring と題して、アラブ、ムスリム、イスラームに関する韓国における民衆の認識について、インタビューによる調査報告をパワーポイントを駆使して示した。質疑応答では 12 名の聴講者から、インタビュー調査の手法（対象の性別や年齢）あるいは、比較対象を時期的にどの時点に設定するかなど、調査方法の妥

当性や正確さに関する質疑がなされ、適切な応答があった。また、日本社会のおける認識との比較が為され、何をポジティブあるいはネガティブと見るかなどでの相違観の指摘がなされた。

Nassr Qollam reza 氏、An Attempt for Islamic Democracy in Iran と題して、イランにおけるイスラーム民主主義の試みについて、イラン革命直後の暫定政府首相を務めたメフディ・バーザルガーンの活動とイデオロギーに寄せて、プレゼンテーションを行った。エジプトやスンナ派社会のおける民主化の問題に絡めて、パレスチナ出身者などから熱のこもった質疑応答が為された。

富田健次

第 2 部会

朝一番、外山健二氏の「アメリカ文学史のイスラーム」は、19 世紀のアメリカを代表する作家、エドガー・A・ランポーの作品をとおして、白系アメリカ人の見た中東・イスラームへ眼差しを検討したものである。それは、古代オリエント世界へのエキゾチズムと古代エジプト黒人への恐怖という二律背反的な感覚の表現であって、題名にある「イスラーム」ではなく、「オリエンタリズム」的なものではなかったか。日本人が 19 世紀の白系米国人の眼をとおして中東・イスラームの文化的価値を検討するとき、三重の文化的色眼鏡からくる歪みをどう自覚して研究していくのか、次回にお聞きしたい。

二番目、福田義昭氏の「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象」は、日本人が隣人となった在日ムスリムを、日本近代文学を代表する大御所作家たちの作品のなかでどんなイメージを結んでいたかを検討したものである。多くの誤謬や偏見を含みながらも、こんなにも多くの作品が表現されていたことに知り驚いた。また、在日ムスリムの表象の代表として、タタール人やトルコ人が多くでてくるのも興味深く、身近でわかりやすい発表であった。

最後、岡戸真幸氏の「カナダのアラブ系移民に関する予備的考察：エジプト系移民を中心にして」は、これまでのエジプト国内の農村から都市部への国内移動を中心とした調査研究でなく、エジプトからカナダへの海外移民をとりあげる「予備的」考察であった。カナダへの海外移民は、国内での一時的出稼ぎ労働者の移動と異なり、移動主体である社会層のレベルが高学歴者や熟練技術者へと変わっている。当然、調査研究アプローチも異なったものになる。今後、どのように研究テーマを展開していくか、見守りたい。

原隆一

阿久津正幸・フセイン・ザナティー「エジプト・ミニア市における初等教育実験：母国語（現代アラビア語）環境と外国語（英語）習得技能の観点から」

本発表は、エジプトの学校教育におけるアラビア語の言文不一致、すなわち授業は母語（アーンミーヤ）、教科書は母国語である標準アラビア語（フスハー）を使用する矛

盾の改善法を、ミニア市での教育改善活動を通じて探る試みである。両研究者は、北見市における実践的英語教育の経験を元にNGO団体を立ち上げ、現地教員と児童の参加を得て、課外活動や目標の設定、反省日誌作成と添削、カルタの使用などの工夫によって母国語教育向上をはかった。その結果、一定の成果が見られ、日本と比較した母国語教育上の問題点が明らかになった。

鷲見朗子・鷲見克典「アラビア語専攻学生の学習動機づけと学習関連結果との関係：自己決定理論に基づく検討」

本発表は、アラビア語専攻学生を対象に、自己決定理論に基づいた学習動機づけ尺度を設定し、学習動機づけと学習結果の関係を探る研究である。同理論における、自律的か他律的かの自己決定性の相違を示す調整の別に、無調整から統合的調整までの５つの下位尺度があり、それぞれ7段階で評定される。3大学174名のアラビア語専攻学生への調査の結果、尺度の妥当性が証明され、自律的動機づけ群が131名、統制的動機づけ群が43名となり、今後のアラビア語教育への課題が示唆された。

小島宏「滞日ムスリム留学生のトランスナショナルな家族とハラール食品消費」

本発表は、滞日ムスリム留学生のハラール食品消費行動が、日本における世帯構成、出身国の実家における世帯構成によってどの程度影響を受けているか研究した。368ケースの個票データに２項ロジット分析を適用し、ハラール店舗利用、ハラールレストラン利用、学食利用、弁当持参の別に分類した。その結果、有配偶（配偶者と別居）はレストラン利用に負の効果、弁当持参に正の効果を持ち、実家での男兄弟の存在は店舗利用に負の効果、学食利用に正の効果を持つこと、また年齢や入国年別に差があることなどが判明した。

佐野東生

第3部会

竹田敏之「モーリタニア学統の広域ネットワークとアラビア語学ーシンキーティー知識人のマシュリクにおける貢献ー」

「現代アラブ世界」から除外されがちなモーリタニアにおけるアラビア語学と、同地出身の知識人のネットワークについて報告された。動画で紹介された伝統的クルアーン私塾（マフダラ）の様子や、シンキーティー知識人のマシュリクへの学的貢献は聴衆の関心を惹きつけた。マフダラと公教育制度との関係性や、アラビア語学におけるモーリタニアとサウジとの親和性、さらにはシンキートという場所に対するアラブ知識人の意識について活発な質疑応答がかわされた。

二ツ山達朗「チュニジアにおける宗教グッズの扱われ方ー来るターン室内装飾具の事例からー」

ムスリムが廃棄しないと語るクルアーン装飾具に注目し、越年後に使用目的を果たしたクルアーン・カレンダーがどう扱われているかを地道なフィールドワークから明ら

かにした報告である。発表者はカレンダーに対して所持者や制作者双方で廃棄されることを避ける対策を紹介し、消費財を非消費財化している特徴を挙げた。質疑応答では、一般的に店舗や事務所に掲げられている大統領や国王の写真が見られないことを受け、「アラブの春」以降の特徴の可能性も示唆された。

高橋雅英「アルジェリア・ブーテフリ政権の炭化水素政策－2005年炭化水素法案を中心に－」

炭化水素産業の自由化に着手したブーテフリカ政権は、2005年に新炭化水素法案を可決させたが、翌年には外資引き締め政策に転じ改正案を提出した。発表者は新法案と改正案の比較から、独占的鉱業権を保持してきた国営石油会社の権限を縮小させ、エネルギー省管轄の行政機関を設立するまでの制度改革の過程を明らかにした。質疑応答では、本政策は当時の石油価格高騰も手伝ってある程度評価されているが、石油・天然ガスの輸出低迷の現在はシェールガス開発反対の動きも含めて不透明な状況であることが示された。

大川真由子

田中友紀「リビア・カッザーフィー体制存続における革命指導評議会の役割とその変容」

本報告は、1969年リビア革命後に7年間にわたり革命政府を主導した革命指導評議会（RCC）に関する考察である。RCCは革命の中心メンバーであった12名の将校から構成されていたが、1975年にはそのメンバー5名によるクーデタ未遂事件が生じ、カッザーフィーは1977年にこれを廃止した。その後、カッザーフィーは基礎人民会議を部族ごとに設置し、有力部族との協力関係によってジャマーヒーリーヤ体制を形成していく。

小林周「政変後リビアにおける民兵組織の活動：南部地域に着目して」

本報告は、2011年「アラブの春」におけるリビアの体制崩壊以後の政治的混乱を、民兵組織と南部地域の情勢不安定化の観点から考察したものである。混乱の元凶ともいえる民兵組織はすでに「革命戦士」から地域に根差した軍事主体に変質している。なかでも、南部では少数民族による民兵組織が、国境を越えて移民問題や過激派ネットワークに関わっており、国際的な「不安定化の連鎖」に一要因となっている。

両報告は、ともに大きな資料的制約の中なかで、リビア情勢の実態に迫ろうとする野心的な研究であり、今後の進展が期待される。

松本弘

第4部会

後藤絵美「イスラームをめぐる世論の形成：20世紀初頭のヴェール論争を事例に」

後藤氏の報告は、19世紀末から20世紀初頭にかけてのエジプトで、当時の知識人がヒジャーブとイスラームとの関係をいかなるものとして捉えようとしていたのかを、アルクール伯爵やカースィム・アミーンの議論を手掛かりとしながら考察するもので

あった。1970年代以降のヒジャーブをめぐる議論の源流ともいえる、アミーンの意義を再評価する報告となった。報告後には、時代背景や今後の研究手法をめぐって質疑応答がおこなわれた。

内田直義「アズハル中等教育機関の独自性とエジプト政府による関与：1961年法律第103号の検討を中心として」

内田氏の報告は、アズハルが管轄する初頭・中等教育機関であるマアハドに焦点を当てて、1961年法第103号を手掛かりとしながら、アズハルとエジプト政府との関係を考察するものであった。報告では、2011年革命後におこなわれたアズハル法の改正や新憲法成立によって、アズハルの位置づけが従来と比べてどの程度変わったのかなどについても具体的に論じられた。国内におけるアズハルをめぐる研究の空白を埋める貴重な報告となった。

千葉悠志

黒田彩加「現代エジプトにおける法・社会・イスラーム―ターリク・ビシュリーの主体的文化論」

本発表は、エジプトを代表する思想家ビシュリーの著作から、その政教関係を巡る議論を考察したものである。ビシュリーは、社会に支配的な文化が主体的役割を果たすという主体的文化論をもとに、基調的文化原理としてさまざまな集団を結束させるイスラームの役割を強調した。これにより本論は、ビシュリーは二極化する現在のエジプト社会において、対立を回避するための中道的思想を提示していると結論づけた。

竹村和朗「国有沙漠地の私有：エジプト・ブハイラ県バドル郡住民の経験と契約から」

本発表は、エジプト・ブハイラ県バドル郡にある「国有地」の沙漠地（開拓地含む）が、個人により「私有」される状況を、発表者が行ったフィールドワークをもとに検証したものである。土地取得の体験談やその契約書などを、法制度的な仕組みと照らし合わせて考察した結果、「国有地」でありながら、「公的団体」にその処分権を認めることで個人の「私有」を可能にするという、エジプトの多層化した売買所有の形態の一端が明らかとなった。

鈴木恵美

第5部会

細田和江報告「イラク系ユダヤ人作家サーミー・ミハエル（Sami Michael: 1926- ）のふたつの＜ワタン＞：初期作品に見るバグダッド／ハイファの表象」

本報告では、イスラエルへ移住したイラク系ユダヤ人作家サーミー・ミハエルの作品をとりあげ、彼の作品の中で故郷がどう描写されているか分析された。バグダッド生まれのミハエルは、移住後アラビア語での執筆を止め、ヘブライ語の大衆小説家として成功する。だがミハエルの中ではバグダッドもハイファも各々異なる意味をもつ

故郷（ワタン）として捉えられていた。質疑では、アラビア語で執筆をやめた理由などについて議論された。

金城美幸「イスラエル建国以前の労働シオニズムにおける民族共生論再考」

本報告は、イスラエル建国以前のシオニズムにおいて、非ユダヤ人（アラブ人）の権利をめぐり展開された議論を、歴史的に明らかにするものだった。当時、シオニズムの中には「民族共生」と「移送」という異なる意見が存在したが、両者は必ずしも排他的ではなく、折衷的な変化が起きたことが、都合のいいアラブ指導者の模索や、建国を導いたと説明された。質疑ではバルカン半島での 19 世紀の事例との比較などの視点が提示された。

山本健介「パレスチナ自治区・ヘブロン／ハリールにおける旧市街復興運動―ユダヤ化政策に抗して―」

本報告ではパレスチナのヨルダン川西岸地区にある聖地ヘブロン／ハリールでの紛争について、歴史的展開や、イスラエル建国以後のユダヤ化政策の進行、またそれへの抵抗の様子について論じられた。ユダヤ化政策は表象・言説と、実態の二層構造で進められ、ヘブロン旧市街のパレスチナ人口は一時期減少した。だがヘブロン再生委員会（HRC）の努力などで、再居住や観光化が進んでいる。質疑では HRC の組織的性格等について質問が出た。

錦田愛子

佐藤麻理絵「シリア難民流入と社会生態空間の拡張：ヨルダン北部都市マフラックの事例から」

本報告は、ヨルダンへのシリア難民流入がもたらす影響について、北部の都市マフラックの社会政体空間の変容分析と、国家レヴェル／地域レヴェルでの難民流入への対応を考察するものであった。航空写真などを用いて都市の拡大の実態が明らかにされるとともに、特に地域レヴェルでの対応については、都市難民を支援するマフラク市政や各慈善組織の活動に関する現地でのインタビュー調査の結果などから実証的に示された。質疑応答では、難民支援に見られる政治的インプリケーションなどが取り上げられた。

吉年誠（一橋大学）「イスラエルにおける「公有地」改革の中の農業入植村：農地の「私有化」をめぐって」

本報告は、キブツなどの農業入植村がイスラエルにおいて土地の「民族所有」に中心的な役割を果たしてきたにも関わらず、現在では土地の私有化を主導する社会集団の一つとみなされているという状況に着目し、その要因について検討するものであった。特に、「公有地」改革の展開や新自由主義時代における農業入植村の意義が検討され、コロニアルな制度的遺産としての入植社会が抱える矛盾について指摘された。質疑応答では、占領地との関わりやパレスチナ人からの土地接収などが関心を集めた。

今井静

第6部会

田熊会員が「マイヤー・ミュッーラー商会にみる19〜20世紀スイスにおけるオリエント産絨毯交易」について、民族学博物館所蔵コレクションを事例に発表を行った。同社社史と絨毯交易の特色を指摘し、課題をクリアした発表内容であったが、スミルナが主要買付地としての位置とその特性の背景など、絨毯製造・供給地側からの史料分析が加われば、より興味深い報告となったに相違ない。

第2報告は、第3代イマーム・フサインの殉教哀悼歌の詠者マッダーヒーに焦点を当てた「現代イランにおけるシーア派哀悼儀礼の変容」という椿原会員の報告である。そこでは、注目を集めるマッダーヒー5名の聞取り調査結果と哀悼歌の映像・音声を組み込み、伝統的宗教儀礼とは異なる音楽芸術性と多様性を十分に伝えた。哀悼儀礼の変化と政治社会的意味に切り込む結論が望ましいとの印象を受けたが、新鮮味溢れた報告であった。

第3報告は、中村会員による「詩人ミールザーデ・エシュギーにおける『祖国愛』の形象」である。「立憲革命期」を生き、非業の最期を遂げたエシュギーは時に言及されるが、「祖国愛」を媒介に立憲革命文学の現代詩分析として再検討する意欲的報告となった。他方、エシュギーへの同時代知識人の影響など、残された課題も散見された。

阿部会員による「イラン社会における環境ディスコースの普及と多様性」が第4報告であった。テヘランの深刻な大気汚染が特に問題となる中で、広く環境問題の活動に従事するNGO関係者、政府機関、ジャーナリスト等からの聞取り調査を踏まえ、環境ディスコースが市民意識に浸透・変化を及ぼしつつあるかを探ろうとした。唯、簡略に過ぎたレジュメの工夫や聞取り結果が十分消化しきれていない印象は否めず、今後この問題への研究継続と発表を期待したい。全体を通して、出席者数は決して多くはなかったが、各報告への活発な質疑応答が行われた。

吉村慎太郎

森山拓也「原発導入に走るトルコ：安全性、民主主義の観点からの批判的検討」

本発表は、トルコで進行中の原発建設計画および日本の原発輸出計画に関する双方の現状を報告、さらに双方の政策の背景と構造について考察し、最後に安全性。経済性、民主主義の観点からトルコの原発導入計画に対して批判的検討を加えたものであった。質疑応答では、原発問題に深い関心を持っていると思われる複数の参加者から質問、コメントがあり、活発な議論がなされた。

鈴木慶孝「現代トルコの「トルコ人のムスリム性」が有する排除の理念に関する一考察：ギュレン運動による社会的包摂の有効性の観点から」

近年ギュレン運動はトルコ国内外から大きな注目を集めているが、本発表は、ギュレン運動が「寛容性」を一つのスローガンとして多文化主義を標榜しつつも、その思想の根底には根強い「トルコ性」があるという矛盾を抱えていて、「トルコ人とイスラー

ムの不可分性」を前提とするギュレン運動は、多種多様な民族的・宗教的マイノリティーを抱えるトルコの「社会的包摂」に必ずしも寄与していないと結論したものであった。

今井宏平「トルコ外交における経済団体の貢献：TOBB の活動を中心として」

「各国間の経済の相互依存関係が深まれば、戦争リスクは低下する」という理論がシリアとの間では通用しなかったトルコであるが、本発表は、外交における経済団体の活動は依然として有効性を失っていないとし、トルコの経済団体、とりわけ TOBB の活動を検証して、外交アクターとしての経済団体の役割を再評価するものであった。理論と実証の両面からトルコ外交を考察した研究発表であった。

粕谷元

第 7 部会

石田友梨・萩原淳「17－18 世紀ハラマインにおける師弟関係―シャー・ワリーウッラーの伝記情報のネットワークによる視覚化とその分析」

石田さんが代表発表者となり、シャー・ワリーウッラーの『ハラマインのシャイフたちの瞳孔』に登場する 70 人のウラマーの相互関係を、デジタル・ヒューマニティーズ（DH）技術の活用によって視覚化することを試みた。師弟関係を直感的に理解しやすい形で示すという当初目的が充分に適ったかには保留がいささか必要だとしても、技術利用による新しい研究のあり方の可能性を実感させてくれる点で注目に値する発表だった。

山本直輝「イマーム・ビルギヴィーにおける『倫理の学としてのスーフィズム』の意味と目的」

16 世紀アナトリアの思想家イマーム・ビルギヴィーに関する近年の研究動向の変化を受け、その思想の全体像を見直した。彼が反スーフィズムの思想家などではなく、倫理主義的スーフィズムの観点に立って同時代のスーフィーに批判的であり、さらに、倫理に欠ける同時代のウラマーに対する批判こそが彼の議論の要点であるとの主張には説得力があった。一方、神秘主義をビルギヴィーがどう評価していたのかの点はさらなる検討課題だろう。

上原健太郎「ブルネイ・ダルサラームにおけるイスラーム型担保融資（Ar-Rahnu）―担保概念とその実践を中心に」

中東と並び現代のイスラーム経済を牽引するマレー・イスラーム世界のうちブルネイについて、1990 年代に開発された担保融資商品（ラフヌ）のイスラーム法上の論理と実践の双方に目配りした研究である。担保物件を金と宝飾品に限定した点が特色であるとの指摘は明快だったが、この商品がブルネイ女性の労働市場への進出と結びついているという結論を導くのには、法学上の議論よりも現地での調査などによる例証が必要だったろう。

赤堀雅幸

渡邊駿「アラブ君主制国家群の体制維持メカニズムを考える：グローバル化時代のヨルダン・ハーシム王国を素材にして」

本報告は、グローバル化時代の王政維持メカニズムをヨルダンの事例から明らかにした。報告では、1980 年代後半のレント収入の減少により統治方法の変容を迫られたヨルダンが、80 年代末から 90 年代にかけて、民主化と新自由主義経済制度の導入、対イスラエル和平路線の推進によって欧米と湾岸諸国からの支援を再度獲得し、議会と選挙制度を用いた取り込みを通して反体制派の凝集力を低下させ、経済政治的資源分配を進めることによって、ヨルダンの体制が維持された、と論じられた。

堀井聡江「近代イスラーム立法の起源：タルフィークを中心に」

本報告は、これまで近代イスラーム立法の特徴として捉えられてきたタルフィークを古典的なイスラーム法学との関連性から再考し、法学上の起源と目的を明らかにした。分析の結果、次元の異なる様々な論点を包括するタルフィークの概念が確立したのは、13〜14 世紀のことであるが、シャリーアの統一という観点は、18 世紀以前には明確でなかったことが明らかにされた。

両報告ともに、活発な質疑が交わされ、極めて有意義な時間となった。

山尾大

第 8 部会

江川ひかり「19 世紀末・20 世紀初頭オスマン帝国における近代演劇および印刷・出版文化にメフメト・ターヒル・ベイが果たした役割」

オスマン帝国において近代演劇文化が花開いた 19 世紀末から 20 世紀初頭において、演劇ポスターとプログラムの印刷の多くを担ったメフメト・ターヒル・ベイに焦点を当てたこの報告は、彼が出版した様々な出版物や彼の関与した新聞・雑誌などの史料を総合的に分析し、彼が演劇のみならず広く印刷・出版文化に一定の役割を果たしたことを明らかにした。これは、従来彼に対して行われてきた様々なネガティブな評価の再考を迫るものであった。

小澤一郎「ガージャール朝によるペルシア湾武器取引規制と南部イランの武装化」

19 世紀末の南部イランへの武器の大量流入という現象に関して、イギリスおよびガージャール朝政府の対応を、主にイギリス外交史料により跡付け、その背景と経緯を明らかにした。報告では、1890 年代のペルシア湾の武器取引規制体制やガージャール朝の様々な取り締まりにもかかわらず武器交易は事実上継続したことが明示されたが、関係する諸アクターの相互関係や、南部イランの武装化の持つ意義の考察などについては、今後の課題として残された。

伊藤彩「オスマン帝国末期における出版と「3 月 31 日事件」（1909）―『火山』紙上のデルヴィーシュ・ヴァフデティの論調」

1908年の「青年トルコ人」革命の反革命として一般に位置づけられる1809年の「3月31日事件」に関し、その首謀者の一人とされたデルヴィーシュ・ヴァフデティの発行する新聞『火山（Volkan)』を史料として、事件の意義を再検討する内容であった。政治、軍部再編、宗教・教育の3つの問題に焦点を当てて考察し一応の結論を得たが、依拠した一次史料がほとんどその新聞のみであったため、今後、文書史料を含む周辺の関連文献を使用したさらなる研究が期待される。

武田祥英（千葉大学J)「第一次大戦期英国の中東分割政策再検討：1910年代英国の中東石油確保政策との関連から」

この報告は、第一次世界大戦中のイギリスのオスマン帝国領分割案について、政策策定に大きな役割を果たした、いわゆる「ド・ブンセン委員会」に焦点を当て、とりわけ石油権益確保に関する議論を詳細に跡付け、1910年代のイギリスの中東分割政策における石油問題の重要性を考察するものであった。その中で、商務省と海軍省の意見の相違や、大戦後の英仏間で合意された委任統治体制と石油権益問題との密接な係わりなどが明らかにされた。

黛秋津

川本智史「15世紀末ブルサの不動産所有に関する考察」

本報告は、15世紀末のブルサにおける不動産所有の状況を、史料上にあらわれる賃貸人（kiracıyan）というタームに着目してあきらかにする試みであった。報告では、徴税調査台帳（Tahrir Defteri）と遺産台帳（Tereke Defteri）という性格が異なる史料が用られ、とくに成立年が２年の差で存在するふたつの台帳が比較された。その結果、賃貸人の割合がふたつの史料で異なるという史料の恣意性や、15世紀末のブルサにおける都市化の進展を確認できたとした。

小笠原弘幸「古典期オスマン帝国における「スルタン」号」

本報告は、一般的にオスマン朝の君主を指す称号として用いられてきた「スルタン」を、文書、花押、銘文、貨幣、年代記など様々な史料にあらわれる具体例について比較しつつ、再検討したものであった。スルタン号は、時代や史料がもつ性格によって様々な用いられ方がなされていたことが確認された一方で、用いられた言語によって使用の有無が分かれること、さらには何が正式名称かという考え方から距離をおくべきことも指摘された。

秋葉淳「裁判官とその発給文書」18世紀オスマン朝歴史家＝シャムダーニーザーデ・フンドゥクルル・スレイマンの業績」

本報告は、18世紀後半の歴史書『諸史の指示針*Mir’i’t-tevarih*』の著者として知られるシェムダーニーザーデ・フンドゥクルル・スレイマン・エフェンディが裁判官として赴任したアンカラとトカトの法廷台帳を検討し、そこにあらわれる裁判官の個人的な特徴をあきらかにしたものであった。報告者は、法廷台帳に残された多数の自

筆と思しき署名から、シェムダーニーザーデの能力や功績に対する強い自意識を読み取ることができると結論した。

澤井一彰

第9部会

中野さやか「マームーンの治世がいかに記されたか：イブン・タイフール『バグダードの書』とタバリー『諸預言者と諸王の歴史』の比較」

イブン・タイフールと彼の約20年あとに生まれたタバリーによるマームーンの治世の叙述が比較検討された。イブン・タイフールは、優れたカリフの支配下でウンマが繁栄した時代であったとマームーンの治世を評価したのに対し、タバリーは、ウンマが分裂へ向かう過程として描いたという違いが見出された。そして、大アミールが出現しアッバース朝カリフの実権が失われた時代の読者は、タバリーの歴史観を支持したと結論づけられた。

森本一夫「ウズベク・ハーンの師父「サイイド・イブン・アブドゥルハミード」の素性：ナジャフからサライ、ホラズムへ」

キプチャク・ハン国のウズベク・ハーンの宮廷で重きをなしていたものの、その素性が知られていなかったサイイド・イブン・アブドゥルハミードなる者は、実はナジャフにおけるフサイン裔の名門家系アブドゥルハミード家に属する人物であったということが史料の裏付けをもって示された。また、彼の活動に関連して、モンゴルのイスラーム受容やモンゴル支配期における十二イマーム派の活動におけるサイイド崇敬の重要性が指摘された。

中道静香「3巻本の『千夜一夜』完全版写本：後期エジプト系（ZER）写本群の成立に関する一試論」

『千夜一夜』の「完全版」写本のうち後期エジプト系（ZER）として一括される約20点の写本群の相互関係については不明な点が多い。そのZERのうち3巻本写本（フランス国立図書館蔵BnF arabe 3595-3597など）について、4巻本写本と内容の出入りや配列が詳しく検討された。その結果、3巻本はZERの4巻本写本よりも早い段階で「完全版」として成立したエジプト系写本と位置づけることができるという結論が得られた。

谷口淳一

角田紘美「アラブ征服期のマグリブの「キリスト教徒」」

本報告は、記述史料の少ないアラブ征服期のマグリブ地域におけるキリスト教徒の存在を再構成するため、その予備的（第一段階と位置付ける）な考察を試みたものである。問題意識は、マシュリクと比べ、キリスト教徒が16世紀には完全に姿を消してしまう、という通説に疑問を提示しつつ、記述史料以外の碑文史料や教会遺跡分布なども参照する必要性を指摘した。碑文史料の地域的偏りの意味やキリスト教徒側の史料の利用可能性などについて質問が出された。未開拓な分野だけに報告者の今後の研究（碑文調査を含めて）の発展に期待をしたい。

篠田知暁「ポルトガル王国支配下のモロッコ北部：特に異教徒間関係を中心に」

本報告は、ポルトガルが 15 世紀にモロッコ北部に進出、支配した状況下で非都市部の「シャイフ」の歴史的役割を明らかにしようとするものであった。ポルトガル語の史料とアラビア語の史料を併用し、「シャイフ」が取り込まれ、住民の監督や徴税の業務に携わっていたことを明らかにした。質疑では、モリスコが情報提供などに関わった可能性や「シャイフ」の、部族や農村に存在の実態（たとえば聖者との関係）などについて議論された。ミクロな地域史を大きな歴史世界にどうつなげていくのか、歴史研究の課題とともに、個別研究の意味を考えさせる重要な報告であった。

辻明日香「コプト聖人アラムに帰せられる聖性：キリスト教とイスラームのはざまで」

本報告は、マムルーク朝期のコプト聖人アラムに関する写本史料を用いて、「狂人」のような振る舞いに示された、その「聖性」を、当時の東地中海世界、およびマムルーク朝期の聖者イメージの中に位置づけようとする意欲的なものであった。結論としては、このような「狂人」的聖性は、当時のカイロでは普通に見られたのではないか、ビザンツ教会の「聖なる狂者」の姿ではなかったのか、との暫定的判断が提示された。質疑では、このような聖者を一般の人がどう受け止めたのか、「マジュズーブ型」聖者の地域と時代的な広がりをどう理解するのか、といった諸問題が議論された。一次史料に基づく確かな研究成果であった。

私市正年

企画セッション１：「アラブの春」からダーイシュ台頭へ：暴力の連鎖と混乱の加害者、被害者、そして実行犯は誰か？

青山弘之「シリア：「今世紀最悪の人道危機」をもたらした重層的紛争」（青山弘之 東京外国語大学）

岩坂将充「「アラブの春」後のトルコ：安定した「民主国家」をめぐる不安定な「同盟」」

高岡豊「「アラブの春」とイスラーム過激派の利害得失」

2011 年初めのチュニジアでの政変に端を発するいわゆる「アラブの春」は、中東・北アフリカ地域に未曾有の政治変動をもたらし、シリアやイラクでのダーイシュ台頭という帰結をもたらした。本企画セッションでは、「独裁」対「民主化」、「テロとの戦い」といった過度に単純化されたな視点を介して観察されがちな「アラブの春」以降の中東情勢、とりわけシリア紛争をめぐる動静に焦点を当て、複雑に絡み合うかたちで展開する政治主体間の関係を実証研究に基づき解明し、政治の実態に迫ることをめざした。

報告１では、シリアにおける紛争に着目し、紛争当時者である政治主体の関係性やその営為が、暴力の連鎖や混乱にどのように作用しているのかが考察された。報告２では、「アラブの春」、なかでもシリアでの紛争の影響を少なからず受けつつも安定した「民主国家」を維持しているトルコをとりあげ、同国内外の政治主体間の「同盟」関係にどのような変化が生じてきたのかについて、AKP 政権とクルド系勢力の関係性を中心に考察がなされた。報告３では、「アラブの春」に伴う政治・社会の変動が、イスラーム過激派と総称される政治主体にどのような利害得失をもたらしたかについて、いわゆる「民主化」へのアル=カーイダの対応、「独裁政権」に対する抵抗への無批判な共鳴、ダーイシュの台頭といった事態に着目しつつ、考察が加えられた。

報告を受け、フロアからは、トルコがダーイシュ戦闘員などの潜入経由地、シリア人避難民受入国であることがいかなる政治的意味を持つか、「シリアの友」や NATO の対応をシリア紛争の持続やダーイシュ台頭においてどのように解釈するべきか、ダーイシュを存在せしめる政治力学とは何か、ダーイシュ台頭がシリア政府、トルコ政府、イスラーム過激派にとってどのような得失をもたらしたか、といった質問が寄せられ、報告者３名が回答した。

青山弘之

企画セッション２：前近代中東の歴史家たち：歴史編纂の狙い・技術・成果

まず大塚修氏が、「普遍史のビジュアル化：ハムド・アッラー・ムスタウフィーが試みた新しい歴史の描き方」と題する報告で、イルハン朝期の歴史書を取り上げ、系譜の図化や帳簿に使われるスィヤーカトと呼ばれる記述方式を用いて、歴史叙述に視覚的表現を用いる試みを行っていたことを示した。これらは、従来の刊本では十分に理解、再現されておらず、手稿本を網羅的に比較調査して得られた成果であった。

次にフレデリック・ボダン氏の「作業場のマクリーズィー：彼の小論集を事例として」では、氏が年来研究を深めているマムルーク朝期の歴史家マクリーズィーについて、ライデン大学所蔵の小品集の手稿本を中心に、彼の晩年の著述活動の性格が論じられた。彼は様々な手稿本の中にちりばめられた、必ずしも本文テクストではない記述を組み合わせて、著述の時期やペース、彼が雇ったコピイストの仕事の方法などを明らかにした。

伊藤隆郎氏の「マムルーク朝の歴史叙述におけるオスマン家の人々」では、マムルーク朝史料に現れるオスマン朝に関わる記述から、①最初期のオスマン家の系譜情報、②アンカラの戦いの記述、を中心に検討された。様々なテクストの中の断片的記述の比較により、オスマン家に関する情報が、時には誤情報を生じながら、どのように伝えられたか、またマクリーズィーなどのマムルーク朝の歴史家に至る、そして彼らの間での伝達過程について明らかにした。

コメンテーターの中町信孝氏は、今出川キャンパスの地に縁のある藤原定家を引き合いに、テクストクリティークの伝統を指摘しつつ、それぞれの歴史家たちの歴史編纂の具体像に関する質問を投じた。また、フロアからもオスマン朝史、マムルーク朝史、比較文学の立場から質問が提出され、セッション終了後も活発な議論が続けられた。

本セッションは、各報告者が史料に深く分け入り、見逃されていた微細な情報や断片化された情報などを網羅的に調査することで、当時の歴史家の営為を具体的に示した点で、非常に意義深いものであった。

亀谷学

【実行委員長として大会を振り返って】

第31回日本中東学会大会が同志社大学今出川校地 にて開催されました。例年ゴールデンウイークから一週間あとの土・日に開催されることが多かったかと思いますが、主催校サイドの慣例行事の都合もあり、本年はそれより一週間遅く5月16日・17日の開催となりました。大会に出席参加された245名の方々に、ご理解と協力への謝意を表します。

また、初日16日シンポジウムの合間には、アラブ音楽のミニコンサートが催され、会場からは中東に学術面からだけでなく芸術面からも触れ親しむ機会を持った旨の声があり、高く評価したいと考えています。演奏実演をこころよく引き受けてくださったウードの常味裕司氏、ヴァイオリンの木村伸子氏、レックのサンペー氏のご厚意に、改めてお礼を申し上げます。

ところで、この大会はおりしも2010年チュニジアに始まった「アラブの春」と呼ばれる政治社会的現象が、イラク・シリア域における「イスラーム国、あるいはダーイシュ」の出現という展開ぶりを見せ、「春」という語の持つ期待感から、いつしか警戒感、いやもっと負のイメージの強い、「恐怖の嵐」とも言える現象へと展開しつつあった状況下での開催となりました。このこともあって、当問題には初日と翌日の二回にわたり、初日は公開シンポジウムが、佐原徹哉、菅瀬晶子、坂梨祥、末近浩太の4会員をパネリストとして開かれ、翌17日には企画セッションが青山弘之、岩坂将充、髙岡豊の3会員によって組まれました。それぞれ、ご専門の高くかつ深い知見と広い見識が提示され、これに関連して熱を帯びた質疑応答がつづきました。

この数世紀来の近代西欧的常識や価値観に敢えて挑戦するかのごとき「イスラーム国」の諸言動や既存の国家機能や国境のメルトダウンともいうべき諸現象について、これらの事象を如何なる視座から見て、分析を試みるか、貴重な見解や意義ある示唆が研究の最前線に立たれる研究者たちから多角的に示されたことは有意義であり、もってこの大会が当学会の高い研究水準の維持と発展において、少しでも貢献をなしえたと言えるのであれば、まことに幸甚の至りと考えます。大会実行委員長として至らぬ点

が余りに多かったと反省し忸怩たる思いですが、もしそうであるならば、少しは救われる思いです。

話題は翻って、時事問題に対応した上記の企画セッション１に並行して、趣向をこれとは大きく別にする企画セッション２が、「前近代中東における歴史家たち」と題し、森本一夫会員を司会として、フレデリック・ボダン、大塚修、伊藤隆郎の３会員の発表と、中町信孝会員のコメントによって組織されました。これは当学会大会の学術・研究の層の深さと幅の広さを示し、大事な側面と言えましょう。また、韓国中東学会からの来賓キム・スワン氏による研究報告も、やはり、当学会大会の学術活動の幅と層の厚みを示すものであり、看過されるべきではないと考えます。

そのほか、１から９に及ぶ各部会では、質高く独自性ある研究成果の報告が数多くなされましたが、報告者に敬意と謝意を表しつつ、紹介と報告は別項に譲ります。

この大会実施において、大会事務局長として企画準備運営の実務全般を統括した森山央朗会員と、多面にわたり参画され献身的に協力された末近会員、岩坂会員ほかの実行委員の方々、また、多忙を押して、司会そのほか様々な側面で惜しみなき助力をしていただいた、あるいは遠路はるばる駆けつけて助力くださった実行委員の方々に、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。また末尾になりましたが、会員でないにも関わらず、会場準備や当日の設営の陣頭指揮を採った同志社大学の藤原佐和子氏、その指揮のもとで会場の仕事を献身的に担った同志社大学と京都大学の大学生たちにも、この場を借りて厚くその労をねぎらい、深く感謝の念を表します。

大会実行委員会委員長　富田健次

【大会ロジの感想と反省】

これまでの歴代大会事務局長の感想と同様に、私、森山の感想も「大変だった」と「ああすれば良かったということがいくつも見つかる」の２点に集約されます。

まず第１点の「大変だった」ということは、大会事務局長を引き受ける際に、当然予想していました。しかし、思っていたより「大変だった」というのが、大会終了後１月を経ての感想です。予想以上に大変であろうことも、予想していたことではあったのですが。

前回の京都での開催は、2010 年の京都大学での開催でした。その際の大会事務局長を務められた長岡慎介会員は、本ニューズレター（125 号）に寄せられた文章の中で、ご所属の京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科は「ロジが強い」という評判を得ており、大会開催においても、その強みが発揮されたと述べられています。一方、今回の開催校の同志社大学は、関西の私大の中では最も会員の多い大学だと思いますが、院生の会員は少なく、院生・学生にロジの経験が豊富というわけでもありません。また、専任教員の会員６名のうち、３名が在外研究で実行委員会に参加できないという状況でした。

そのような状況で、何とか大会を開催できたのは、長岡会員が実行委員として、プログラムの組み方になどに関して経験に基づいた貴重な助言を下さったことや、同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科の岩坂将充会員、立命館大学の末近浩太会員と今井静会員（学振PD）、甲南大学の中町信孝会員といった、関西在勤を中心とした「若手」会員の方々が、実行委員として快く協力して下さったことによります。加えて、同志社大学神学部事務室の職員が色々と相談に乗ってくれたことと、同志社「生え抜き」の神学部特任助教、藤原佐和子氏（東南アジアのキリスト教研究）が、非会員ながら会場担当実行委員として参加してくれたお陰でもあります。

今回の大会では、ロジに投入できる院生の会員がいないことから、学生・院生のアルバイト・スタッフを例年よりも多く確保しました。学生スタッフの確保と管理でも、藤原氏の貢献は大きなものでした。大会事務局長の私が、受付業務などの指示を十分にできない中で、藤原氏と学生スタッフが臨機応変に対応して下さいました。学生にとっては、学会なるものに関与した経験が楽しかったようで、学生スタッフとして参加した学部学生たちから、「また同志社で中東学会大会を」と時々言われます。私としては、「何を気楽に」と苦笑いですが、その中から将来の会員が出るようなことがあれば、例年に比べて多額の人件費を使ったのも有効な先行投資と強弁できるような気もしています。「ロジが強い」とはあまり言えない同志社大学での開催でしたが、それはそれで得るところもあったと言えましょう。

他方、感想の第2点、「ああすれば良かった」ことについては、あげ出せばきりがありません。その中で、深刻に反省しなければならないことを1点あげると、広報の不備があります。特に、初日の公開企画に関して、タイトルと企画趣旨文をなかなか固めることができず、組織的な広報をほとんど行えなかったことは、シンポジウムの講演者とミニコンサートの演奏者の方々に対して、大変申し訳なく思っています。

結果的には、講演の内容や演奏者の方々の評判、および、関西在勤の会員各位の口コミなどのお陰で、会員と一般・学生を合わせて約180名の聴衆を集め、会場がスカスカという事態は避けられました。東長靖会長の紹介で、京都新聞が前日の紙面に告知を載せてくれたことも大きかったと思います。しかし、そのような広報をもっと前から行えていれば、実際に倍する聴衆を集めることができるテーマと内容であったと反省しきりです。月並みではありますが、公開企画は、広報を前広に行わないと、テーマや内容の良さに十分に見合った成果は上げられない、というのが今回の最大の教訓です。

懇親会の飲み物にワインを用意しておかなかったことなど、他にも反省すべき点は多々ありますが、皆様のご協力によって、第31回年次大会を大過なく終えることができましたことに、改めて御礼を申し上げます。

大会実行委員会事務局長　森山央朗

【大会決算】

日本中東学会第31回年次大会決算

収入（円）			支出（円）		
大会開催費		400,000	文具・消耗品費		44,834
大会参加費	合計	337,000	プログラム・要旨集等印刷・製本費		184,065
	事前登録1,000円×161名	161,000	郵送費		118,864
	当日登録2,000円×88 名	176,000	学生スタッフ関連費	合計	386,000
懇親会費	合計	529,000		事前準備作業謝金12名（時給800円）	33,600
	事前登録一般5,000円×66名	330,000		当日作業謝金合計	306,000
	事前登録学生4,000円×14名	56,000		学部生14名（日給7,000円）	146,000
	当日登録一般6,000円×18名	108,000		院生12名（日給8,000円）	160,000
	当日登録学生5,000円×7名	35,000		大会当日昼食費（2日分）	46,400
2日目弁当代（1,000円×50名）		50,000	1日目公開企画におけるアラブ音楽演奏者に対する謝礼		50,000
書店寄付（5,000円×4社）		20,000	2日目参加者弁当代		50,000
同志社大学学会開催補助金		100,000	懇親会費		642,000
錯誤振込		7,000	錯誤振込返金		7,000
学会予算より補填		40,843	振込手数料		1,080
収入合計		1,483,843	支出合計		1,483,843

託児所決算

収入（円）			支出（円）		
利用者負担	2,000円×3名	6,000	託児所運営委託費	保育士賃金、給食費、保険料等	32,070
学会予算より補填		26,286	振込手数料		216
収入合計		32,286	支出合計		32,286

森山央朗

【託児所利用についてのご報告】

今年も年次大会の託児所のお世話になりました。日本中東学会の年次大会で託児所が設置されたのは、第22回大会（2006年、東京外国語大学）が最初だそうですが、わが家は第24回大会（2008年、千葉大学）からの常連で、今回は五回目です。どの大会での体験も、それぞれの実行委員会の皆さんや保育にあたってくださった方々、一緒に過ごしたお友達のおかげでよい思い出になっていますが、今回はとくにうれしい驚きがありました。

例年であればお昼休みにあたる時間帯に企画セッションがあったので、子供の昼食や休憩など、どのように時間配分しようかと思いながら託児所に寄ってみました。すると託児所の方で子供たちの昼食の準備があるとのこと。わが家の子供もすでに楽しく過ごしていたらしく、「邪魔をしてくれるな」という視線を送ってきたので、こちらは安心して、ゆっくりとお昼休みを過ごし、企画セッションにも出ることができました。

大会のあいだ、子供たちは部屋の中で遊んだり、工作をしたり、御所まで散歩をしたり、充実した時間を過ごしたようです。今回も気の合うお友達に出会えたそうで、終了後、いろいろとうれしそうに報告してくれました。また、生まれて初めて関西弁空間（？）で過ごしたことがおもしろかったらしく、「ほんまやー」など、習得した語彙を披露していました。

持ち帰った作品群

今振り返ると、託児所がなければ学会参加もあきらめた年が多かっただろうと思います。こうして研究活動を続けてこられたのも、一つに託児所設置にかかわってくださった会員の方々のおかげだと思います。寄付をくださった方々やそれをうまく運営してくださった実行委員会の方々のおかげで、毎年無理のない費用で利用できたことも本当にありがたいことでした。最後に、今回、すてきな空間を準備してくださった森山事務局長をはじめ実行委員会の皆さん、みぎわ保育園さんに心より感謝いたします。来年度の大会でわが家の託児所利用は最後になるかと思います。今後は私自身も託児所設置にかかわるなど、より多くの子育て世代の会員の方々が、ストレスを感じることなく学会活動や研究活動をできるようにお手伝いしていくことができればと願っています。

後藤絵美

第32回日本中東学会年次大会の開催について

2016年度の第32回年次大会は、慶應義塾大学が担当校となりました。日程は2016年5月14日（土）・15日（日）の両日で、会場は慶應義塾大学三田キャンパス（東京都港区三田2‐15‐45）です。三田での開催は1992年の第8回年次大会以来ということにな

ります。最寄り駅は、田町駅（JR 山手線／京浜東北線）、三田駅（都営地下鉄浅草線／三田線）、赤羽橋駅（都営地下鉄大江戸線）です。実行委員会を中心に土曜日の講演会等をこれから企画いたします。新緑の「三田の山」へどうぞご参集くださいますようお願い申し上げます。

長谷部史彦

『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告

１．31-1 号、31-2 号編集中

現在、31-1 号の編集作業が今年７月中の刊行を目指して大詰めに入っています。また、31-2 号につきましては、6 月 1 日に投稿を締め切りました。投稿数は、特集を除き、13 本（うち英語６本、日本語７本）でした。現在審査作業に入っているところです。

２．次号締め切りのお知らせ

次号 32-1 号の締め切りは 12 月 1 日です。論文、研究ノート、書評等さまざまなジャンルでの投稿をお待ちしております。とくに欧文での投稿を歓迎しております。

３．博士論文要旨

AJAMES では、会員による中東関連の博士論文要旨（英文）を掲載しています。とくに締め切りを設けておりませんので、最近博士論文を提出された会員の方は、随時ご投稿ください。また、お近くに中東関連で博士論文を提出された方がいらっしゃれば、ぜひ投稿を呼びかけてください。

４．本年度編集委員会の体制

本年度の編集委員会は以下のような体制になりました（敬称略）。前年度からは、林佳世子委員が任期満了で退任しましたが、それ以外編集委員の顔ぶれに変更はありません。

編集委員長：粕谷元

副編集委員長：保坂修司、近藤信彰

編集委員：縄田浩志、松永泰行、藤元優子、横田貴之、山尾大、阿部るり、堀井優、土屋一樹、青柳かおる、浜中新吾

海外編集委員：Dale F. EICKELMAN、R. Stephen HUMPHREYS、KIM Joong-Kwan、Abdul Karim RAFEQ、SONG Kyung-Keun

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下のとおりです。

〒156-8550　東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部史学科　粕谷元気付

『日本中東学会年報』編集委員会
ajames-editor@james1985.org

５．平成27年度科研費（研究成果公開促進費・国際情報発信強化（B））の採択

昨年度、「国際化によるアジアからの中東研究発信強化とオープンアクセス推進の取組」の名称で応募した平成27年度科研費（研究成果公開促進費・国際情報発信強化（B））が採択されました。期間は1年で、金額は230万円です。

６．AJAMES投稿規程の改正

近年、博士論文が大学などの機関リポジトリで公開される流れが出てきており、機関リポジトリで公開された博士論文の全文、あるいはその一部がAJAMESに投稿されることも想定されます。AJAMESの投稿規程には「投稿原稿は、国内外を問わず、未発表のものに限ります」（第2条）との規定があり、機関リポジトリでの公開が「未発表」にあたるかどうか、学会としてきちんと定めておく必要が生じたため、今回（2015年5月）、投稿規程を以下のように改正しました。

第2条　投稿資格および投稿要件

投稿者は、原則として日本中東学会会員に限ります。ただし、10.に規定する非学会員にも投稿を認めます。

投稿原稿は、国内外を問わず、未発表のものに限ります。

なお、機関リポジトリで公開された、または公開される予定の博士論文については、その全文、あるいは一部を『日本中東学会年報』に投稿することが可能です。ただし、その場合には、公開、あるいは公開予定の博士論文の内容そのままではなく、元論文に対し実質的かつ発展的な改稿が行われることを条件とします。後述する「中東研究博士論文要旨」の投稿は、このケースにはあたりません。

（下線部を追加）

また、上記の改正とは別に、ブラインド審査をより厳格に行うため、第5条第3項も以下のように改正しました。

第5条　投稿方法

5.3)　匿名審査を厳正に行うため（7.を参照）、最終的に掲載が決定するまで、投稿原稿には、注や参考文献も含め、執筆者名、所属先、職位、謝辞など、執筆者を特定できるような情報・表現を記入しないでください。

（下線部を追加）

たとえば、「拙稿」のような表現は避けていただきますよう、お願いいたします。

７．CiNii の閲覧状況

国立情報学研究所論文情報ナビゲーター(CiNii)を通じた 2014 年 1 月から 2015 年 5 月までの本誌の閲覧件数は以下のとおりです。

2014 年

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
639	210	175	499	511	583	605	221	243	645	577	522	5470

2015 年

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
705	257	184	383	513								

ちなみに 2012 年は合計 5076 件、2013 年は合計 4824 件でした。

AJAMES 編集委員長　粕谷元

第 5 回日本中東学会奨励賞の選考結果および同賞授与式について

第 5 回日本中東学会奨励賞奨励賞の審査が同賞選考委員会において行われた結果、以下の理由により丸山大介氏の以下の英文論稿が選ばれました。なお、同賞授与式は 2015 年 5 月 16 日、同志社大学で開催された日本中東学会総会の場において行われました。

丸山大介「現代スーダンにおけるタサウウフとサラフ：ルカイニー教団の教義と教導を事例として」（MARUYAMA Daisuke, “Seeking Articulation between Sufi and Salaf: Doctrines and Education of al-Tariqa al-Rukaiyniya in Sudan,”）『日本中東学会年報（*AJAMES*）』29-1，2013 年。

［理由］

本論文は、これまでほとんど紹介されたことがなかったスーダンのルカイニー教団に関して、同教団のシャイフとのインタビューや教団の儀礼への参加などのフィールドワークを通じて、貴重な一次情報を収集し、鋭い分析を加えて、同教団のきわめて興味深い性格を明らかにした論考である。本論文の問題設定、分析視点および実証方

法は、スーフィズム・タリーカ研究において、国際的にも十分に価値があると評価しうる論文である。

日本中東学会奨励賞選考委員会
委員長　臼杵　陽

【受賞者の言葉】

この度は、日本中東学会奨励賞という大変名誉な賞を頂戴し、まことにありがとうございました。賞を頂くにあたりまして、私を入門から今日まで懇切に教導してくださる東長靖先生、また、スーフィズム・聖者信仰研究会で長らくお世話になっており、さらなる飛躍の場を与えて下さった赤堀雅幸先生に心から感謝致します。また、論文を推薦してくださった先生方、編集委員の皆様、有益なコメントで論文の完成度を高めてくださいました査読者の皆様にも心より御礼申し上げます。

さて、受賞対象となった論文は「タリーカ・スーフィーヤ・サラフィーヤ」を称するスーダンのルカイニー教団の教義に焦点を当てた論文です。この論文の議論は、教団シャイフに対するインタビューに依存しすぎており、教団の包括的な理解という意味では限界がありますが、「サラフのスーフィズム」をはじめとした、この教団に特徴的な思想内容の一端を示せたのではないかと思っております。

今から約10年前、私は留学先のエジプトでアラビア語を学び始めておりました。アラビア語と出会って約10年という節目に、スーフィズム研究を本格的にスタートさせた京都で栄えある賞をいただける、これほど光栄なことはございません。今はただ、謙虚にスーフィズム・タリーカ研究に取り組み、日本のスーフィズム・タリーカ研究を牽引していけるような研究者になりたいという気持ちでいっぱいです。

折しも授賞日の2015年5月16日は、ラジャブ月27日でした。この日は、預言者ムハンマドがイスラーとミウラージュを経験した日だと言われております。私の調査地スーダンでは、ラジャビーヤと呼ばれる祝祭が盛大に開催されていたことでしょう。遠いスーダンに思いを馳せつつ、栄えある賞を頂き「天にも昇る」気分でおりました。

この度はまことにありがとうございました。

丸山大介

第9回シャイフ・ザイード書籍賞を塙治夫氏と杉田英明氏が受賞

今年度（2014-15年）に第9回目となるシャイフ・ザイード書籍賞（Sheikh Zayed Book Award）の受賞者として、「翻訳賞」部門で本学会元会員の塙治夫氏のナギーブ・マフフーズ著カイロ3部作が、また「多言語によるアラブ文化」部門で会員の杉田英明氏の『アラビアンナイトと日本人』が、日本人として初めて受賞しました。

同賞は、アラブや中東の文化・社会・歴史・芸術等を扱った非アラビア語による優れた著作を選ぶもので、今年度は英語・スペイン語・日本語が対象となり、すでに本学会メールでご案内したように昨年9月16日に日本での第一次選考会議が開かれました。その後、候補作が絞り込まれ日本側の選考委員の加藤博会員も参加する2月の会議を経て、4月に最終結果が報告されました。5月11日にアブダビで開催された授賞式では、出席した加藤会員と三浦徹会員が代理で賞を受け取りました。

今回の受賞は、日本におけるアラブ研究の水準の高さを国際的に示すものであるとともに、アラブ世界の日本への関心の高さをも表すものと考えます。両氏の受賞について、こころよりお祝いし、ともに喜びたいと思います。詳しくは、加藤会員の「アブダビ・ブックアワード印象記」『UAE』（日本アラブ首長国連邦協会 No.58. SUMMER 2015）を参照。

長沢栄治

寄贈図書

【単行本】

栗田禎子『中東革命のゆくえ：現代史のなかの中東・世界・日本』大月書店、2014年

床呂郁哉編『人はなぜフィールドに行くのか：フィールドワークへの誘い』東京外国語大学出版会、2015年

武藤慎一『宗教を再考する：中東を要に、東西へ』勁草書房、2015年

八木久美子『慈悲深き神の食卓：イスラムを「食」からみる』東京外国語大学出版会、2015年

Syed Ali Raza Naqvi, *Shī ʻa Marriage Law*, Islamic Research Institute, International Islamic Univeristy, Islamabad, 2012.

_____, *Shi ʻa Divorce Law*, The Ahl al-Bait World Assembly, 2012.

_____, *Shi ʻa Inheritance Law*, The Ahl al-Bait World Assembly, 2012.

Tom Mills, et.al., *The Cold War on British Muslims: An Examination of Policy Exchange and the Center for Social Cohesion*, Spin Watch Monitaring Pr and Spin, 2012.

【逐次刊行物・ジャーナル等】

飯塚宜子、王柳蘭編『子供たちは多様な地域に何を学ぶのか：感じ方の育みと総合的理解の視点』地域研究コンソーシアム（JCAS）（JCAS Collaboration Series 9, JCAS公開シンポジウム報告書）（2015年3月）

宮原暁他編『世界はレイシズムとどう向き合ってきたか：地域研究とジャーナリズムの現場から』地域研究コンソーシアム（JCAS）（JCAS Collaboration Series 10, JCAS公開シンポジウム報告書）（2015年3月）

川上桃子他編『地域から研究する産業・企業：フィールドワークとディシプリン』地域研究コンソーシアム（JCAS）（JCAS Collaboration Series 11, JCAS公開シンポジウム報告書）（2015年3月）

『季刊アラブ』153号（特集 湾岸の憂鬱）（2015年夏）

Perceptions: Journal of International Affairs, 19-1 (Spring 2014), 19-2 (Summer 2014), SAM: Center for Strategic Studies, Ministry of Foreign Affairs, Republic of Trukey.

Arches Quarterly, 2-1 (Summer 2008), 2-3 (Winter 2008), 3-4 (Summer 2009), 3-5 (Winter Dec 2009-Feb 2010), 4-6 (Summer 2010), 4-8 (Spring/Summer 2011), 5-9 (Spring 2012), The Coldoba Foundation Cultures in Dialogue.

The Mena Report: Analysis & Insights from the Arab World, 1-1 (Januray 2013), 2-1 (February 2013), 3-1 (March 2013), 4-1 (April 2013), 5-1 (May 2013), 6-1 (June 2013), 7-1 (July 2013), 8-1 (August 2013), 9-1 (September 2013), 10-1 (October 2013), 11 (November 2013), 12-1 (December 2013), The Coldoba Foundation Cultures in Dialogue.

Occasional Papers, 5 (September 2012), The Coldoba Foundation Cultures in Dialogue.

会員の異動（2015年4月以降）

【新入会員】

阿部　哲

山西　厚

能勢　美紀

小寺　愛惟

寺本　めぐ美

Iyas Salim

沖　祐太郎

青木　健太

【所属先・連絡先の訂正・変更】

吉田　達矢

川床　睦夫

泉沢　久美子

岩本　佳子
澤井　一彰
近藤　洋平
鈴木　啓之
大川　真由子

事務局より

大会事務局を兼ねるという異例の事態で、同志社大学での学会事務局はスタートしました。両方の事務局長を兼務しても、連絡の手間が省けるなど、何とかなるのではと安請け合いをしましたが、やはり無茶はするものではありませんでした。学会事務局の方は、前事務局長の山口さんと前事務局補佐の千條さんに頼ることになり、大会事務局の方は、実行委員各位と学生スタッフに頼ることになってしまいました。

学会事務局の運営も、未だ立ち上げ中といったところで、皆様にはご迷惑をおかけしております。とにもかくにも、頼りない事務局ですが、ご助力・ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

森山央朗

編集後記

5 月に京都の同志社大学で開催されました第 31 回年次大会は、大変盛況のうちに幕を閉じました。実行委員会の方々、また参加された皆様、ありがとうございました。その盛況ぶりは、本号でもご紹介しておりますので、印刷版と合わせてお読みいただければ幸いです。

来年の年次大会は、慶応大学で開催されます。例年通り、次号以降にて、そのご案内を掲載いたします。ぜひ、ふるってご参加ください。

松本弘